

El relojero de la puerta del sol

タイトル プエルタ・デル・ソルの時計を創った男

El relojero de la Puerta del Sol

著者 エミリオ・ララ Emilio Lara

出版社 エダサ EDHASA

出版年 2017 年

ページ数 352 ページ

言語 スペイン語

読者対象 一般（特に世界史が好きな読者）

ジャンル 文学（ヨーロッパの歴史フィクション）

レポート作成 小原京子

概要

世の絶対王政のスペインから逃亡。故郷よりはるかに進歩的な大都会ロンドンに辿り着き、将来に明るい兆しが見えてきた頃、時計職人としての類まれな腕前と情熱を買われ、世界で一番有名な時計「ビッグ・ベン」の修理を依頼される。並行して、画期的な構造の時計を創り上げるという自分の夢も追い、仕事にうちこむホセ。しかし、誰も自分の過去からは逃れられない。命を狙う影が忍び寄る。ホセは身に迫る危険から逃れることができるのか？歴史はできたと告げている。なぜなら、ホセの夢はやがて、プエルタ・デル・ソル（注：マドリードの中心街の地名）の時計として世に知られることになるからだ。

著者 エミリオ・ララは、大半の読者にとっては未知のスペイン人ホセ・ロドリゲス＝ロサダの物語の中に読者を引き込む。彼は世界で最も有名なふたつの時計に関わる歴史的な偉業を成した実在の人物だ。これは、過酷な運命に逆らいながら、常に前向きにあらゆる困難を克服し、遅咲きながら真実の愛に出会い、夢を実現するため自分に与えられた時間を支配した男を描いた歴史ドラマである。

おもな登場人物

ホセ・ロドリゲス＝ロサダ：リベラルな思想を持ったスペイン人時計職人。

ホセ・ソリーリャ（父）：マドリード警察本部長。保守派。自由主義者狩りを指揮する。

ホセ・ソリーリャ（子）：劇作家、詩人。

ジョン・ハミルトン：ロンドンの時計屋の主人。ホセの雇い主。

アナ・ハミルトン：ジョン・ハミルトンの妻。夫の死後、ホセと再婚。

ヘンリー・バルティモア：実業家、慈善活動家。ホセの友人。

あらすじ

頭見失い、父親から折檻される。狼に食べられた仔牛の残骸を見つけたホセは、父への恐怖から家出を決意し、新しい人生、自由を求めて故郷を後にする。まずはトゥルヒージョで床屋の見習いをするが自分には向いていないと見切りをつけ、マドリードを目指す。幻灯機を使った見世物の助手をしながらスペイン中を旅してまわり、機械の扱いや修理に非凡な才能を発揮するが、主人になけなしの貯金を取られそうになり、結局生き延びるために軍隊に入る。

月、ソリーリャは、ホセとその仲間たちをカフェでの集会で一網打尽にする計画を立てる。しかし逆に覆面をした男たちに襲われ、通行証発行の署名を強制され、監禁される。ホセはその通行証を持ってフランス国境を目指し北に向かって馬を走らせる。ソリーリャは人相書きを描いて部下に追跡させるが、ホセは、間一髪、国境を越えて亡命する。

月、ホセはロンドンに到着。移民支援委員会の紹介で、安宿を借り、時計屋の掃除夫として働き始める。掃除をしながら、職人たちの時計づくりを観察し、店主ハミルトンの客への説明に耳を傾ける。ある日、時計作りの修行経験がないホセが、壊れた時計を見よう見まねと勘によって直すのを目の当たりにし、店主はホセを職人に昇進させる。

ホセは腕が良く、アイデアに富み、その上、客の心理を掴む才に長けていた。ある日、実業家ヘンリー・バルティモアが来店し、「時間に抵抗して戦う時計」を注文。店主が対応に四苦八苦するのを、ホセが「針が逆方向に動く時計」というアイデアを出して解決。これをきっかけにホセとヘンリーの間に友情が芽生える。

その頃、体の調子が悪いハミルトンを甲斐甲斐しく世話する妻のアナに、ホセは恋心を抱くようになる。ハミルトンが胃がんと診断され病状が悪化する中、ホセのアナへの恋心は募る一方で、ホセは愛の告白をする。アナも同じ気持ちだが、大きな恩のあるハミルトンのために、ふたりは気持ちを心の中に封じ込める。ハミルトンの死後、ふたりは世間体を考え結婚は棚上げにしながらも、愛を深めていく。

歳くらいの女の子がゴミバケツに走って行ってその中に入るのを目撃。子供たちは、教師夫妻から体罰や屈辱的な扱いを受けていた。ヘンリーは教師たちを首にして、体制を一新する。

面の4つの醜い時計が別々の時刻を指しているのを見て、あることを思いつく。プエルタ・デル・ソルのために時計をつくって贈るのだ。世界にひとつの、近代的な、永遠に残る時計を。

エーカーを」と発表され、当てが外れた親戚たちは憤慨して出て行く。スーザン・ヒルは、ヘンリーが援助していた学校でかつて見た、あのゴミバケツに入っていた少女だった。ヘンリーは少女に立派な教育を与えて面倒を見てきたのだった。

秒ずつ遅れる「ビッグ・ベン」の修理に通う毎日が始まる。ある日、散歩のとき誰かにつけられている気配を感じ、その数日後には、ピストルらしきものを持った男に追いかける。さらに、プリム將軍と会食後、馬車に乗って帰る途中、ピストルを持った男に進路を妨害されるが危機一髪逃れる。襲撃事件が警察に届けられ、ホセにはロンドン警察のホプキンス巡査部長が護衛として付くことになった。あらゆる手を尽くしたが時計の遅れの原因がわからないまま日にちだけが過ぎていき、諦めかけていた頃、秤に細工をして肉の重さをごまかす肉屋の話を聞いて、「ビッグ・ベン」の修理のヒントを思いつく。ホセは、作業場の秤から重りを外し、「ビッグ・ベン」の振り子の上部に重りを乗せる。振り子の重心を移動し振れの速度を少し早くするのだ。重りに加えコインの山を積み上げ、記録を取りながら何度も調整。そしてついに「ビッグ・ベン」の遅れを克服する。ヴィクトリア女王に送られた請求書は7シリング2ペンス。それは、重りの調整に使ったコインの値段だった。

警察の捜査が実り、襲撃犯人はスペインの植民地キューバの砂糖業者に雇われた殺し屋で、標的はホセではなくプリム将軍だったことが判明する。奴隷制度を批判するプリム将軍がクーデターを起こしてスペインで権力の座に着けば、自分たちの商売が危うくなると考えた砂糖業者が差し向けた刺客だったのだ。スペイン政府の関与は不明だが、犯人はスペイン大使からの圧力で釈放され、スペイン行きの船に載せられて国外追放になる。

18
66年11月19日、イサベル2世の誕生日、ホセの夢の結晶は、プエルタ・デル・ソルの時計としてお披露目された。

時の鐘を打つ。内戦をくぐり抜け、電気仕掛けではなく当時のオリジナルの部品がそのまま今も使われ動いている大時計。あと百年は動き続けるだろう。一方、ロンドンの「ビッグ・ベン」の振り子の上部には動きを調整するためのコインが今も置かれている。

所感・評価

月、英国に
亡命して時
計職人とし
て頭角を現
していくロ
ンドン時代
、「ビッグ
・ベン」の
修理とプエ
ルタ・デル
・ソルの大
時計づくり
に情熱を注
ぐ1866年の3つの時代を行きつ戻りつしながら展開するが、あらすじは時系列でわかりやすくまとめた。

世紀のスペインと英国の雰囲気を感じながら、歴史上の実在の人物、ホセ・ロドリゲス＝ロサダの人生を通して、「ビッグ・ベン」とプエルタ・デル・ソルの大時計にまつわる裏話を知ることができる楽しみがある。

世紀とは、英国の産業革命、ナポレオン戦争、南米の独立運動などが起こり、保守・伝統派と自由・進歩派がせめぎあい、目まぐるしいスピードで世界が変化していた時代。英国やフランスが発展していく一方、スペインは絶対王政が続き、進歩の波に乗り遅れていた。テムズ川の汚染、煤だらけのロンドンの空気、チャールズ・ダーウィンの進化論の論争、銀板写真、資本家と労働者の対立、貧困など、ホセの物語とともに語られるエピソードは、読者がこの時代を知る助けになるだろう。

著者エミリオ・ララの文章は明瞭で簡潔で読みやすい。ロンドンの時計店「ロサダ」が繁盛するにつれて、顧客や店の奥に開放されたサロンにやってくる名士たちという形で歴史上の人物が次々と登場するのを面白いとみるか、軽いとみるかは読者次第。リベラル派のプリム将軍、保守派のカブレラ将軍、ヴィクトリア女王... 『オリヴァー・ツイスト』の著者チャールズ・ディケンズ、『ドン・ファン・テノリオ』の著者ホセ・ソリーリャ、『不思議の国のアリス』の著者ルイス・キャロルなど当時活躍した作家たちも登場する。『不思議の国のアリス』の白ウサギが持っている懐中時計は、もしかしたら「ロサダ」の時計から思いついたのかもしれない、と想像してしまった。

「まるでリベラの絵のように、炎の光で間接的に照らされて...」、「ブドウ畑で働く男たちの影が、まるでエル・グレコが描いたように長く伸びていた」、「ベラスケスが描いた軍（いくさ）の神マルスがロンドン警察に志願してきたような風貌だった」などのスペイン絵画に例えた表現は、視覚的想像をめぐらしながら読む楽しみがある。

「読者を夢中にさせる物語、巧みな筆致」（ラ・セマナ誌）

「スリル、謎、犯罪、そして魅力あふれる時計職人」（ラ・バングアルディア紙）

「ララは語りのテンポと雰囲気自在に繰る作家である」（ABC紙）

など、ポジティブな批評を受け、刊行後1か月で、スペインの書籍ベストセラートップ10入りを果たした。第24回アンダルシア批評家賞（2017年小説部門）受賞。

試訳（p.152の1行目からp.153の最後まで）

1830年12月20日、ロンドン

ロンドンの街に雪がしんと降りしきる中、ホセは時計屋で働き始めてからこれまで起こったあらゆる出来事について考えていた。全てがあつという間だった。ミスター・ハミルトンは、雇った掃除夫が役に立たない部品をゴミとして捨てずに、時計を修理するために再利用していることにすぐ気づいた。しかもそれで時計を動くようにした。

時計づくりの修行経験がないホセが、他の職人の働きぶりを観察しただけで、修理不能の時計を直すのを目の当たりにし、ハミルトンは信じられない思いだった。

「おまえには、生まれ持った時計づくりの才能がある。すごい！前代未聞だ」と驚きの叫びをあげた。

ミスター・ハミルトンは、ホセの見事な仕事をチェックしようと、ホセが組み立てなおした3つの時計の歯車、中心軸、ぜんまいなどを点検した。

ほれほれし、驚きのあまり目にはめ込んだルーペが2度も落ちた。素晴らしい出来栄えだった。

ホセの英語はまだまだで、主人の誉め言葉のところどころしか理解できなかった。ミスター・ハミルトンはホセの技巧をほめちぎただけでなく、熱い思いをほとばしらせながら、ホセの手から幕と塵取りをもぎとり、前掛けをはずし、彼の両肩に手を置いて言った。

「たった今から、おまえは私の時計工房の職人だ。見習い修行もする必要なし。おまえの才能は間違いない。私の目に狂いはない。」

パイント注文して、あれこれ思いをめぐらせた。イギリスでは、機転と才能があれば、職場でスピード出世できた。

ごくりとビールを一口飲んだ。店の客のちんぷんかんぷんな会話も気にならなかった。物思いにふけていた。イギリスとスペインを比べながら、かすかな微笑みがもれた。彼の祖国が長年拒んできたチャンスをイギリスは与えてくれた。もう一口ごくりと飲んだ。この上なくおいしかった。

長い年月を経て今初めて、本当の天職を見つけた瞬間だった。

Source URL: <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/el-relojero-de-la-puerta-del-sol>